丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞　作品集

令和４年度　第２回　～「春」～

はじめに

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、子どもたちに詩を身近に感じてもらい、詩を書くきっかけとなってほしいとの願いから、「はじまり」という意を込め、丸山薫の第一詩集「帆・ランプ・鷗」より命名いたしました。

第二回目となる今回は、丸山薫の詩のタイトルに多く使われている「春」をテーマに作品を募集したところ、全国の小学生、中学生、高校生から多数のご応募をいただきました。どの詩も春の情景を思い描いた力作揃いとなっており、この賞を実施している意義を改めて実感しているところです。

この作品集には、「帆・ランプ・鷗」賞、優秀賞及び佳作の作品を掲載しております。入選されました皆さまに心よりお祝い申し上げます。また、作品集を手にとられた方にも、子どもたちが言葉に表した様々な想いを感じていただければ幸いです。

今後もこの賞をきっかけとして、全国の子どもたちに、豊橋ゆかりの詩人・丸山薫を知っていただくとともに、詩を書くことを通じて豊かな感性や表現力が育まれ、詩に親しむ文化が広まるよう願っております。

最後に、この賞の実施にあたりご協力いただいた丸山薫賞運営委員会の皆さま、ならびに、審査にご尽力いただいた選考委員の先生方に心からお礼申し上げるとともに、ご応募いただいた皆さまの今後益々のご活躍をご祈念申し上げ、発刊の挨拶とさせていただきます。

令和五年二月四日

豊橋市長　浅井由崇

目　次

はじめに

【小学生の部】　選者　以倉　紘平
入選作品……6
選　評……22
選者作品……25

【中学生の部】　選者　高橋　順子
入選作品……30
選　評……43
選者作品……46

【高校生の部】　選者　高階　杞一
入選作品……51
選　評……61
選者作品……63

丸山薫の略歴と業績

【小学生の部】

選者　以倉　紘平

「帆・ランプ・鷗」賞

春　愛知県豊橋市立栄小学校　四年生　松岡　麻莉子

優秀賞

お花見　愛知県豊橋市立牛川小学校　五年生　星野　脩

春の一日　愛知県豊橋市立旭小学校　四年生　坂元　隼都

さくらウォーク　愛知県豊橋市立牛川小学校　四年生　中村　紗希

すごいぞタンポポ！　愛知県豊橋市立栄小学校　三年生　豊田　蒼真

さくらの木　愛知県豊橋市立栄小学校　四年生　佐口　加奈

佳作

わたしははるがすき　愛知県豊橋市立豊小学校　一年生　加藤　唯愛

春　愛知県豊橋市立栄小学校　二年生　原田　瑛介

春の本音

愛知県豊橋市立旭小学校
六年生　待井　誠司

やさしい季節

愛知県豊橋市立旭小学校
六年生　小坂　瑠那

きょうからいちねんせい

愛知県豊橋市立旭小学校
一年生　すがぬま　りょうま

うれしいな

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　鈴木　成

さくらのまほう

愛知県豊橋市立栄小学校
五年生　浅岡　寿音

新学年になると

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　内藤　春花

虫と弟とぼく

愛知県豊橋市立栄小学校
六年生　柴田　憲吾

わたしの春

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　浅野　万由

入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

春

気がつくと、朝の空気が
いつもみたいにつめたくない

朝、外に出た時に見えていた
白い息がなくなっている

いつもの道を歩くと
何もなかった所に
花がさいていた

いつの間にか少し変わっている
いつの間に来ていたのかな
春って、どこからやって来るんだろう

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　松岡　麻莉子

優秀賞

お花見

愛知県豊橋市立牛川小学校
五年生　星野　脩

世界がピンク色になる季節
学校のまどから見えるピンク色の花
ヒラヒラ　ヒラヒラと
桜の花が散るのを見ながら
うとうと　うとうとと

キンコンカンコーン
授業終わりの音が聞こえると
ぼくはドキドキしてきたよ

家に帰って宿題を終わらせて
お父さんとお姉ちゃんが帰って来るのを
待っている
バタバタ　ドタドタと
「ただいま」の声に
ウキウキ　ウキウキ
「よし、行こう！」

お母さんの声で出発だ！

今日は家族みんなでお花見だ
ここはとりわけピンク一色の世界
見上げると真っ黒の空の中にきれいなピンク

いいにおいもして来たよ
からあげ　やきそば　りんごあめ
何を買ってもらおうかな
ワクワク　ワクワク

「もうおなかいっぱいだー」
心もおなかも満たんで
みんなで家に帰ります

「ただいまー！」
あたたかいお家で
あたたかい春

春の一日

愛知県豊橋市立旭小学校
四年生　坂元　隼都

土手の石ころをけりながら
ぼくは母と弟と散歩をした
冬の間は一ぴきもいなかったカメが
あたたかくなって川の中を泳いでいる
弟はうれしそうに
カメの数を数えながら歩く
母はつくしを見つけて
「春だねえ」と言った
ぼくも
「今日はあったかいね」と言った
見回すと土手のあっちこっちに
黄色のたんぽぽが咲いている
弟は走っていって
たんぽぽをつみはじめた
「バシャッ」と音がした
見ると大きなこいが泳いでいる
このこいはここで大きくなったのかな
だれかが川に流したのかな

ぼくがそんなことを考えている横を
こいがゆうゆうと泳いでいった
祖母の家の近くのこの土手が
ぼくは大好きだ
土手の草をふみながら歩くのも
川の流れをずっと見ているのも
ぼくは大好きだ
ぼくが大人になっても
これからもずっとずっと
このけ色は消えないでほしい

さくらウォーク

愛知県豊橋市立牛川小学校
四年生　中村　紗希

見わたすかぎりさくら
ピンクのさくらの花びらが
風にゆられてちっている

今日は一年に一度のお花見
おばあちゃんの家の近くの大きな公園
さくらで有名なたきがしら公園
毎年ここでのお花見を楽しみにしてる

朝早くからお兄ちゃんと三人でウォーキング
夜に雨がふったので、地面には水たまり
でも、雨がやんでよかった
予定どおりのウォーキングの始まりだ
大きくしんこきゅうすると空気がおいしい
はだ寒くて、ぶるっとふるえた
きのうの雨で落ちた花びらが
水たまりにうかんでいた
水たまりの上をゆっくり歩くと
ぴちゃぴちゃ音がして花びらがゆれた
わたしたちみたいにウォーキングしてる人

朝早いのにけっこういるね
歩きつかれたのかベンチにすわってる人
屋根の下でのんびりするのにぴったりだね
みんなさくらを楽しんでいる
さすがに野球のグラウンドにはだれもいない
お昼になったらしあいが始まるのかな

遊具はぬれていて遊べない
かわりに坂道でダッシュした
よういーどん
お兄ちゃんの合図でいっしょに走りだす
ぐんぐんスピードがでる
つめたい空気が体に入ってくる
ダッシュをくり返しながら公園を一周した
体はぽかぽかになっていた

おばあちゃんの家にもどってから
お茶をたっぷり飲んだ
楽しいさくらウォークだったね
うん、来年もまた行きたいね

すごいぞタンポポ！

愛知県豊橋市立栄小学校
三年生　豊田　蒼真

石のかいだんのスキマから
タンポポが
顔を出している

せまいせまいスキマから
いっしょうけんめい
首をのばしている

見ていると
何だか力がわいてくる

「すごいぞタンポポ！」
「がんばれタンポポ！」

ぼくは見かけるたびに
心の中でさけぶんだ

かいだんをおりる時は
ふまないように
しんちょうに

わた毛ができたら
思いっきりふかせてね

さくらの木

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　佐口　加奈

春のあたたかい日
初めてかった犬のこまと
さくらを見に公園へ

初めてみたさくら
こまはどう思っただろう
きれいと思ったかな
ふしぎに思ったかな
さくらの多さにびっくりしたのかな

わたしがその時見たさくらは
いままでで一番きれいに見えた

なんでだろうと考えた
たぶん大好きなこまと
いっしょにみたからだろう

次の春がまちどおしい

こまと家族みんなで
まんかいのさくらをみれたらいいな

佳　作

わたしははるがすき

愛知県豊橋市立豊小学校
一年生　加藤　唯愛

わたしははるがすき
ぽかぽかしてあったかいんだもん
ありやちょうちょうも
きもちよさそうにあそんでるもん

やっぱりはるはちょっときらい
こどもえんのせんせい、おともだちと
あえなくなっちゃったもん

でもやっぱりはるはすき
わたしがえらんだぴんくいろの
らんどせる
ピカピカでとってもうきうきするもん

わたしははるがだいすき
つうがくろにさくらのはながさいて

わたしは１ねんせいになったよ
あたらしいおともだちが
たくさんできたよ
らいねんのはるには
わたしは２ねんせいになるよ
うきうきわくわくがいっぱい
だからわたしははるがだいすき

春

めだかすいすいはる
バッタピョンピョンはる
ちょうちょヒラヒラはる
さくらひらひらはる
たんぽぽふわふわはる
たけのこにょきにょきはる
たいようポカポカはる
クラスがえドキドキはる

愛知県豊橋市立栄小学校
二年生　原田　瑛介

春の本音

愛知県豊橋市立旭小学校
六年生　待井　誠司

春は、壊れている
人の心も壊れかけている
人間は、春からしたら、バットエンドへ
導くただの悪魔だ
今、人間は食物連鎖の頂に達っしている
知能も生物の頂に達っしている
だからこそ人は狂っている
だからこそ春は人が憎い
自然はここまで長い歳月をかけて成長し繁茂
し進化をとげてきた
それも良い方向にだ
人間は日々悪い方向へ進化している
過ぎ去る時間は変えられない
春は人間をどう思うか
これまで作りあげた自然を粉々にされてどう
思うか
人間のけがらわしい進化を見てどう思うか
決っしてあらがうこともできない
春は、泣いていた
「環境破壊に」

春は、泣いている
春は、泣いている
春は、泣いている
人間の強意に心が、折れる、折れる
人間の発想に心が、折れる、折れる
人間の進化に心が、狂う、狂う
人間なんていなきゃよかった
人間の生きる価値ってあるの
自然をけがす理由はただの、商売、それは
人間にとって大切な生涯
春という体に、ナイフが刺さる
春ってそんなに大事じゃないの
春が楽しみ楽しみって、言っても
結局皆春を殺している
春を泣かせて
最後、辛くなるのは、人間だよ
後悔するのは、人間だよ
だからこそ最後に伝えたいことがある。
「皆春を大事にしてね」

やさしい季節

愛知県豊橋市立旭小学校
六年生　小坂　瑠那

春はやさしい季節
やさしい色　明るい色で
あふれる季節
桃色　白色　黄色　赤色
いろんな色であふれてる

春は暖かい季節
太陽の光でぽかぽか
暖かい季節
心も体も気持ちも
ほっと温まる

春はふわふわした季節
たんぽぽのわた毛のように
ふわふわした季節
ふとんにくるまったように
落ち着く気分

春は命がたくさんの季節
動物　鳥　いろんな生き物が
冬をこえて目覚める季節
どの生き物も春を待っていたように
元気にはしゃぐ

春は
ぽかぽか
ふわふわ
やさしい季節
命でいっぱいあふれる季節
植物　動物　鳥　虫　人類
全ての生き物が
春のやさしさ　めぐみをうけて
生きている

春は生き物を元気にする
まほうの季節

きょうからいちねんせい

さくらがひらひら
ぽかぽかいいおてんき
きょうはぼくのにゅうがくしき
ぶかぶかのきいろいぼうしと
かるいらんどせるといっしょに
わくわくしながらがっこうへいくよ
あたらしいきょうしつ
あたらしいせんせい
あたらしいともだち
ちょっとどきどきしちゃう
みんなとなかよくしたいな
おもくなったらんどせるといっしょに
うきうきしながらおうちにかえるよ
きょうからぼくはいちねんせい

愛知県豊橋市立旭小学校
一年生　すがぬま　りょうま

うれしいな

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　鈴木　成

ムクムク　ムクムク
土の中で目を覚ました虫たちが
ヒョコッと顔を出す
「よろしくね」とアリにあいさつ
うれしいな

キラキラ　キラキラ
木のえだから真新しい緑の葉が
ニョキニョキッと顔を出す
「よろしくね」と鳥にあいさつ
うれしいな

フワフワ　ユラユラ
つぼみだった花たちが
パッと咲きはじめる
「よろしくね」とチョウにあいさつ
うれしいな

ワクワク　ドキドキ
今日からぼくは4年生
新しい教室に入ってみる
「よろしくね」とみんなにあいさつ
うれしいな

次の春も
そのまた次の春も
あいさついっぱい笑顔いっぱい
うれしいな

さくらのまほう

愛知県豊橋市立栄小学校
五年生　浅岡　寿音

さくらはきれい
だけどすぐ散る
散るからこそ尊い
そのはかなさゆえに
みんなを笑顔にしている

さくらはきれい
はなびらは「はあと」のかたち
散った最後も「はあと」は地面を彩り
じゅうたんをつくる
最後まであきらめず色あせない

さくらはきれい
みんなの心を動かす
みんなの心を豊かにしてくれる

さくらはきれい
さくらふぶけば　幸せ運ぶ

さくら咲くは笑顔咲く
幸せの花　さくら

新学年になると

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　内藤　春花

三月の三年三組
たくさんの会話があった
じゅ業中にいろんな発表があって
みんな元気いっぱいで
しゃべりやすいクラスだった
終業式の日が来るのが
とてもさみしくて不安だった
次のクラス、どうなるんだろう
次のクラスもしゃべりやすいといいな

四月の新しい教室
ああ、見たことない子がいっぱいだ
ちゃんと友達ができるだろうか
心配でどきどきした
話しかけようとしても
はずかしくてできない気持ち
だけど、友達をつくって楽しくしたい

みんな元気いっぱいで
しゃべりやすいクラスは、
毎日、学校が楽しくなると
わたしは、もう知っている

近くの席の子に話しかけてみた
先生が学活の時間をもり上げてくれた
そうして五月になって
友達づくりのもやもやは、
へっていった

たくさん友達がつくりたいな
わたしにもできるかな
できることから
助け合って
気持ちをわかり合える
友達をふやしたいな

虫と弟とぼく

愛知県豊橋市立栄小学校
六年生　柴田　憲吾

虫の多い春になり今年も虫をとりに来た
父と弟はさっそくカマキリを見つけて
必死に追いかけている

でもぼくはちょっといやだった
だってつかまえた虫も何日かたったら
死んじゃうから
今日つかまえた虫もうまく世話ができずに
死んじゃうんだ
そう考えると虫はあんまり
つかまえて帰りたくない
つかまえてもその場でちょっと
観察だけしてにがしてあげたい
だって虫もがんばって
生きているんだから

その話を弟に話したことがある
でも弟はすごくいやがった

弟は虫が大好きでどこでもすわりこんで
探している
つかまえた虫を連れて帰って
大事そうによく見ている

今だってぼくの心配をよそに
弟はバッタをつかまえて喜んでいる

弟が帰る直前で虫たちを
たんぽぽの集まる草むらににがした
なんでと聞いても何も言わない
ぼくが話したことが心に届いたのかな

わたしの春

長野のおばあちゃんちの庭でふきのとうをとっていたらヒヨドリがきてわたしの頭をかすめていったし、うめの花をつついて落としてしまうのでどうしてそんなことするのかなと思っておもいついた詩です。

ヒヨドリめ　庭で頭を　かすめるな
うめの花をつっつくな
どうしてそんなことするの

庭にはちがきて、いろいろな花のまわりをとんでいました。そして、むらさき色の花のところにとまりました。むらさきが好きなのかなと思って見ているとべつのはちがきてそのはちはピンクの花にとまりました。それを見て思いついた詩です。

花が咲く　花だんの上に　はちがとぶ
はちが好きなの　なに色かな

春になると庭で虫とりをします。モンシロチョウやシジミチョウはすぐにつかまるけどアゲハチョウはなかなかつかまえれないので思いついた詩です。

愛知県豊橋市立栄小学校
四年生　浅野　万由

モンシロチョウ　春になったら
虫とりだ　アゲハはなかなか
つかまらない

かーかはおひるねでだんご虫のようにねていてわたしは庭で穴ほりをしてその中にねころがっていてそれがだんご虫みたいでとーとは書さいでしごとをしているときがだんご虫みたいだから思いついた詩です。

かーかはひるねでだんご虫
まゆは畑でだんご虫
とーとは書さいでだんご虫

春休みがおわる少し前の日にあーあもうおわりだと思って少しざんねんだったけど新しい先生になるのが少し楽しみだったので思いつきました。

春休み　もうすぐおわりだ　ざんねんだ
先生だれかな　少し楽しみ

選　評

「帆・ランプ・鷗」賞

春　　松岡　麻莉子

行間をいれてもわずか13行の短い詩ですが、言葉に無駄がなく、春の訪れの不思議が見事にうたわれています。＜気がつくと、朝の空気が／いつもみたいにつめたくない＞詩のタイトルが「春」なので、この一行は、春の訪れについて書かれたものと、すぐ分かります。

＜朝、外に出た時に見えていた／白い息がなくなっている＞＜いつもの道を歩くと／何もなかった所に／花が咲いていた＞も、春が来たという作者の発見の歓びが、みごとにうたわれていて、素晴らしいと思いました。三か所に使われている否定表現、実にお見事でした。天地自然の不思議に、八〇歳を超えた私も、大変感動しました。松岡麻莉子さんの感受性の力、詩の力と思います。

優秀賞

お花見　　星野　脩

学校の宿題をすませ、お勤めから帰って来る父と姉を待つ。さあ出発よとお母さんが声をかける。家族みんなで出かける夜のお花見の幸福感が見事に描かれていて、すばらしい。

春の一日　　坂元　隼都

祖母の家の近くの川。母と弟と一緒に川の土手を散歩することが習慣になっていて、鯉が泳ぐ春の川は特別のお気に入りだという。大人になっても川の景色は、我が心を支えてくれるにちがいないとうたう。大人のにおいのする作品。

さくらウォーク　　**中村　紗希**

年に一度のお花見。残念ながら夜に雨がふって、桜も散り、地面に水たまりができた。でも作者は兄と予定どおりウォーキングをし、兄と全速力で走ったというのだ。何をしても楽しいということだろう。

すごいぞタンポポ！　**豊田　蒼真**

石の階段の＜せまいスキマから／いっしょうけんめい／首をのばしている＞タンポポに、作者は＜見ていると／何だか力がわいてくる＞階段を下りる時は、踏まないように、慎重に下りたと書いている。詩のかたちもよく、お見事です。

さくらの木　　**佐口　加奈**

はじめて飼った愛犬こまを連れて、さくらを見に行ったら、桜は今までで＜一番きれいに見えた＞＜たぶん大好きなこまと／いっしょにみたからだろう＞と書いているところ、なんとも心優しく、感動しました。

佳　作

わたしははるがすき　**加藤　唯愛**

＜やっぱりはるはちょっときらい／こどもえんのせんせい、おともだちと／あえなくなっちゃったもん＞に拍手します。すばらしいです。

春　　**原田　瑛介**

たった8行の詩。＜めだかすいすいはる＞からはじまって最終行の＜クラスがえドキドキはる＞の飛躍がすばらしい。

春の本音　　**待井　誠司**

＜春は、壊れている／人の心も壊れかけている・・春は、泣いている・・＞批評精神がたのもしい作品です。

やさしい季節　　小坂　瑠那

〈春は生き物を元気にする／まほうの季節〉と春のめぐみをうたった心やさしい詩です。

きょうからいちねんせい　すがぬま　りょうま

すべてひらがなで書かれた詩の最終行〈きょうからぼくはいちねんせい〉に思わずがんばれと声をかけたくなりました。

うれしいな　　鈴木　成

〈ワクワク　ドキドキ／今日からぼくは4年生〉何年生になってもこのドキドキ感は消えないでほしいと願います。

さくらのまほう　浅岡　寿音

〈さくらはきれい／みんなの心を動かす／みんなの心を豊かにしてくれる〉桜は本当に魔法使いですね。

新学年になると　内藤　春花

三月の終業式、四月の始業式、別れと出会いの季節に対するさみしさと期待がよく伝わってきました。

虫と弟とぼく　　柴田　憲吾

バッタなど虫を捕まえて飼うことの大好きな弟と飼っても死なせてしまうので、虫を捕らない主義の作者との対立がとてもおもしろい。

わたしの春　　浅野　万由

どうしてこんな詩が生まれたか、解説5篇と作品5編からなるユニークな作品群で、とても面白く読みました。

選者作品

初夏の微笑み

以倉紘平

水辺で遊んでいる子供
散歩を楽しんでいる人
木陰でスナックをとっている家族
ジョギングしているカップルがある
初夏の河岸
なだらかな堤のスロープ

英国では　小学校一年生の国語の教科書は
会話体で始まっているという

――上の道を走っているのはだれですか
――ジムさんです

――下の道を走っているのはだれですか
――奥さんのリズさんです
――スロープを
　駆け上がり　駆けくだりして共に走っているのは？
――ジムとリズの飼っている犬（ホワイティ）です

草の葉のつややかなかがやき
声帯を吹きわたる風
――犬（ホワイティ）は斜面にどんな文字を描いていますか
――太陽の*S*
――すみれの*V*
――歓びの*J*

この風景にはタイトルがありません
次の時間までにすばらしいのを考えてくること
パパやママと相談してもいいですよ
ではいい週末をね

詩集『地球の水辺』より
（一九九二年　湯川書房刊）

【中学生の部】

選者　高橋　順子

「帆・ランプ・鷗」賞

たけのこ　愛知県豊橋市立二川中学校　三年生　久田　倫博

優秀賞

私の知る春　沖縄県北中城村立北中城中学校　三年生　一條蓮

今日から始まる新しい自分　愛知県豊橋市立南陽中学校　一年生　浜島　永遠

春とあの日　愛知県豊橋市立東陵中学校　三年生　鈴木　梨紗

芝桜との思い出　愛知県豊橋市立二川中学校　二年生　佐藤　彩香

春の三色のあまい丸　愛知県豊橋市立石巻中学校　一年生　鎌田　憲新

佳作

桜より・・　愛知県豊橋市立南陽中学校　一年生　山田　陽登

メジロ　愛知県豊橋市立高師台中学校　一年生　太田　晃誠

わたげ飛行機　愛知県豊橋市立二川中学校
一年生　海野　あかり

春に救った命　愛知県豊橋市立二川中学校
一年生　松坂　茉生

春風　愛知県豊橋市立二川中学校
二年生　齊藤　陽日葵

私の世界　愛知県豊橋市立二川中学校
二年生　篠崎　日那

百花　愛知県名古屋市立千種台中学校
二年生　モッピー

入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

たけのこ

愛知県豊橋市立二川中学校
三年生　久田　倫博

伸びろたけのこ
竹の成長は驚くほど速い
さっきまで見下ろしていたたけのこは今では
立場逆転
たくましくかたく僕らを見ている。
たけのこは地下茎で他とつながっている。
見えないところで協力しているのだ

伸びろたけのこ
竹は人間と深く関わってきた
竹刀から昔の道具、流しそうめんまで様々な
ところで見ることができる。

伸びろたけのこ
竹はミステリアスな植物だ
竹には節がある
節の部分だけはなかが空洞ではない
節が竹を支えているのだ
しかしなぜ竹が空洞なのかはまだ謎である
むかしから人間の身近にある竹だ
だからこそ興味がそそられる

伸びろたけのこ
小さい竹はたけのこだ
むかしから食べられてきたたけのこは独特な
味がする

竹は儚く美しい植物だ
たけのこは地面から顔を出した時には人によって刈り取られる
竹は数十年に一度しか花を咲かせない
しかも花を咲かせると枯れてしまう
竹は地下茎を使いたけのこの成長を促すのだ
竹は子孫のため、人間のために一生を終えるのだ

竹は昔から今までそしてこの先まで僕たち
を見つめているだろう
伸びろたけのこ

優秀賞

私の知る春

沖縄県北中城村立北中城中学校
三年生　一條　蓮

春は、命の花籠。冬の間眠っていた全ての生き物が、息を吹き返す。色とりどりの花のように、鮮やかに。

春は、夢路。布団の中は心地よくて、いつまでも夢が見られる気がする。

春は、風邪。暖かくなってきたからといって油断をすると、たちまち喉をやられてしまう。

春は、黒米。たまごふりかけをかけた黒米ごはんは、星空みたいで綺麗で。なんだか食べるのがもったいない。

春は、太陽。太陽は空の母。朝カーテンを開けると、日光が私を優しく包み込む。私はまだ大丈夫。やわらかい太陽の腕に抱かれて、私は自分に語りかける。そんな暖かいひととき。

春は、別れ。おめでとうとさよならが詰まった花たちが、しずくをひとつ、振り落とす。それも数日後には儚く散ってしまって。大切な思い出もいつか記憶の木から散ってしまうのだろうか。

春は、出会い。

何か新しいことが、私を待ち受けている。楽しいことも、苦しいことも。

私はその全てを愛せるような暖かい春になりたい。

今日から始まる新しい自分

愛知県豊橋市立南陽中学校
一年生　浜島　永遠

今日から新しい僕が始まる
好きな食べものも好きな事も
友達も気になるあの子も
全部僕しだいなんだ。
なぜならこの世界の主人公は
僕なのだから

今日から新しい僕が始まる
どんな選択をしようと
どんな逆風がふいても
全部僕しだいなんだ
なぜならこの世界の主人公は
僕なのだから

春とあの日

愛知県豊橋市立東陵中学校
三年生　鈴木　梨紗

春が彼女を連れ去った
私はまだ幼かった
彼女もまた幼かった
大通りの前の
私の家
そこで彼女と
遊んだ『あの日』
私はとても幸せだった

春が彼女を連れ去った
春はまだここにあるのに
彼女の姿が見えない
ハラハラと散る桜の花びらは
彼女が消えた
『あの日』を思い出させる
『あの日』もっと遊べばよかった
そんなことを思いながら
幼い私は泣いていた

春が彼女を連れ去った

そんな昔のことを
今思い出した
『あの日』見た春の光は
今見ている冬の月の光と
とてもよく似ている
今になって分かった
春が彼女を連れ去った理由が

あたりまえのことだったのだ
彼女の体は小さくて
弱かった
日に日に痩せていくことにも
気づいていた
そしてとうとう
あの『日』が来ただけだ

私の大好きな、
大好きだった
彼女の名前は
雪だるまのスマイリー

芝桜との思い出

愛知県豊橋市立二川中学校
二年生　佐藤　彩香

ビュービューと揺れながら
祖母とリフトから見た
大きな　大きな山を
花が包み込むように
咲いていたのを

そよそよと吹かれながら
母や妹と歩いて見た
小さな　小さな花が
地面を埋め尽くすように
咲いていたのを

さつまいものような赤紫
生クリームのような白
桜もちのようなピンク
ブルーベリーのような青紫
どの色も鮮やかに咲いた

山は白い世界が広がってた
冬の役目を終えたスキー場から
ピンクの世界が広がった
春の出番を迎えた花畑へ
移り変わっていた

私の心にはこの綺麗な景色と
この大切な思い出が
刻み込まれており
変わることはなかった

家族と撮った
写真を見るたびに
懐かしく思うことは
変わることはなかった

春の三色のあまい丸

ぼくは、好き
ピンク・白・緑のあまい丸が
ぼくは、好き
もちもちのあまい丸が
ぼくは、好き
花みで食べるあまい丸が
食べると春がきたなっと思う

愛知県豊橋市立石巻中学校
一年生　鎌田　憲新

佳　作

桜より・・

私はきれいなタンポポだ
きれいなきれいなタンポポだ

だけどだけど
みんなは桜を見てばかり
桜の写真をとるばかり

けれども私はそれでいい
桜より
目立たなくてもそれでいい

さらなる景色を追い求め
ふわりふわりと
とんでいく
とおくへとおくへ
とんでいく

愛知県豊橋市立南陽中学校
一年生　山田　陽登

メジロ

愛知県豊橋市立高師台中学校
一年生　太田　晃誠

ぼくが2歳の時にこの家に引っ越してきた。
引っ越してきたころは、ぼくの家の庭には、
赤白い土があるだけで何もなかったらしい。
いつの間にか木が植えられて、
母はよく、
「鳥が来る庭がお母さんの夢」
と言っていた。
ある日ぼくは、朝ごはんを食べていると、
「シー、メジロがいる」
と、母が窓の外を指さした。
ぼくと兄は、窓からこっそり庭をのぞいた。
そこには目のふちが白いかわいい緑の鳥がいた。
それから春になってメジロが遊びに来る季節になると、ぼくは、
葉が落ちた庭の木に
カリカリになった残ったミカンを半分にして
さすようになった。
机の下から兄とかわいいメジロをながめるのがぼく達の楽しみになった。

この家に住んで4年が過ぎたころ、
緑のインコの赤ちゃんが家族になった。
一年中家の中で緑のインコのぐーちゃんと遊ぶようになったぼくは、
まだ寒い庭に、目のフチが白い鳥を見つける
と嬉しくて、5年目の春からは、
緑の鳥を肩にのせて
庭に遊びにきた緑の鳥を
ながめるのが日課になった。
「ぐーちゃんメジロさんかわいいね」
「今年もメジロが来たね」
緑の羽の生えた兄弟と
仲良く今年も春が来たことを
よろこぶ。
お母さんの夢がかなって庭には色々な鳥が来るようになったけど、
やっぱり春の庭に来るメジロが
ぼくは一番すき。
ぐーちゃんの次に。

わたげ飛行機

愛知県豊橋市立二川中学校
一年生　海野　あかり

真っ白でふわふわな機体。
たんぽぽ航空会社のわたげ飛行機だ。
今日は心地よい春風が吹いている。
絶好のフライト日和。
少し風が強まった。もうすぐ離陸。
ふわりと一号機が飛び立つ。
続いて二号機、三号機と飛び立っていく。
ふわり、ふわり
風にのって、上昇していく。
ふわり、ふわり
風にのって、学校の上を、田んぼの上を、
ふわり、ふわり
行き先は風にまかせて、
ふわり、ふわり
風が弱まり、ゆっくり地上に近づいていく。
下には緑の植物やピンク色の桜、白い花が
たくさん見える。
ゆっくり、ゆっくり茶色の地面に近づく。

そして、着陸。
ふわりと地面に降りる。
着陸したわたげ飛行機は、長い時間をかけ、
新しい飛行機を造り出す。
次の春には真新しいわたげ飛行機の完成だ。
ふわり、ふわり。
春の大空を旅する、
わたげ飛行機。

春に救った命

愛知県豊橋市立二川中学校
一年生　松坂　茉生

ある春の日の午前中私は自転車に乗っていた心地よい風を感じながら
なぜだかその時はいつも通らない道を通っていた今にもなって思い返してみてもなぜその道を選んだのかわからない
ただの気まぐれだったのかもしれない
その結果私と家族はとても大変で貴重な体験をした生き物の命の大切さを知ることとなった
自転車をこいでいると猫の泣き声が聞こえた気がした
道路のわきのダンボールの中で生まれたばかりの子猫が五匹大きな声でないていた
まるで私に見つけてくれといわないばかりに
生まれたばかりの小さな命私に見捨てるという選択肢はなかった
私が気がつかなかったらきっと数時間後には死んでいたのだろう
いったい誰が捨てたのだろう
私はすぐに家族に相談した
答えはすぐにでたがんばってこの小さな命を救おう
それからは目の回る毎日だった
ミルク、トイレの世話、動物病院
ミルク、トイレの世話、動物病院
ミルク、トイレの世話、動物病院
子猫たちは私たちの生活リズムなんておかまいなしだ
私の手のひらの中で必死でミルクを飲む小さな命
保護した時は冷たかった体も今はとても暖かい
命ってとても暖かいものだと私は知った
今では元気に家の中を走り回っているまるでスポーツカーのように
大変だったけど私がとてもよかったと思う
春の出来事
こんな私でも小さな命を救った春

春風

愛知県豊橋市立二川中学校
二年生　齊藤　陽日葵

冷たい風がふきあれ
しろいゆきがとけはじめたころ
春風がぼくのてをひいた

春風とてをつなぎ
ピンクにかがやくかわのほとりを
にこにことほほえむわかばのよこを
また
しとしととちりゆくかれはのよこを
どんどんどんどんどんどんすすむ

そしてきえた
めのまえでてをふるきみと
ぼくのせをおすあなたと

きみがぼくのてをとり
あなたはぼくをみをくり
つぎはきみとどんどんすすむ

そう
風のように

私の世界

愛知県豊橋市立二川中学校
二年生　篠崎　日那

私はとても目が悪い
病気とかじゃなく
単純にいでんで
私は目が悪いから
人の顔が見えない
だから友達に会ったよね
と言われても
「え、そうなの」
と返事をする
キレイな風景、
可愛いぬいぐるみ
をいい目で見たかったなと思う
目がよかったら
私に似合わないめがねもしなくていいし
見えない時に目を細める必要もない
そう思ってたある日
ＳＮＳで色盲という物をしった
人とは違う色に見えてしまう病気だ
病気なのにつつみ隠さずどうどうとしていた
とてもかっこよかった

その方は絵をかくのが好きな人だった
絵に色をぬる時に困ってしまうだろうな
と私は思った
だけどその方は
それ武器にしてすてきな色で絵をかいていた
その絵はステキだった
人とは違う
だけどステキだった
人と違うからダメじゃなくて
人と違うからこそ
という考え方だった
その考え方がすごく強く感じた
私もそんな強い人になりたい
そう思った
だから私は
目が悪いからこそ
自分なりに
がんばっていきたいな
と思った

百花

愛知県名古屋市立千種台中学校
二年生　モッピー

私は春に生まれた。
百花は私の名前。

母が私の名前を名付けたのは、生まれたのが花が次々に咲く美しい季節だったから。
人生にもたくさんの花を咲かせてほしいと思ったから。

小さい頃は母にお花が咲いてるねと見せてもらうと嬉しかったけど。
花柄のお洋服も着てたけど。

今はお花より蜂蜜が好き。
可愛いお洋服よりかっこいい服が好き。

お友達と遊ぶのは楽しいけど。
学校の勉強も難しくて嫌になる。
制服もゴワゴワして着たくない。

でも春が来ると
ちょっと嬉しくなる。
母もいつもより少し優しくなる。
私も甘やかされていい気分。
なんだか小さい頃みたい。

ずーっと春だといいのにな。

選　評

「帆・ランプ・鷗」賞

たけのこ　　**久田　倫博**

いまはコロナ禍でちぢこまりがちな世の中だが、この詩では「伸びろたけのこ」という一行がくり返されて、読むほうでも背筋が伸びる気持ちになる。竹の林は見た目にもすこやかである。タケノコはおいしいし、若い竹はラーメンの中に入れるメンマになるそうだ。ザルやカゴなどの竹製品にもなる。「竹は子孫のため、人間のために一生を終えるのだ」。人間ばかりでなく、イノシシもタケノコが好物とか。ともあれ竹はこれからも私たちの友であるだろう。詩にとって竹は魅力的な題材である。

優秀賞

私の知る春　　**一條蓮**

たいへん整った詩で、安定した力をもっている人です。「春は」と始まると、『枕草子』の「春はあけぼの」が思い浮かぶ。「春は、黒米」というのは面白い。「春は、太陽」というのも独特。最終行の希望がいつまでも失われませんように。

今日から始まる新しい自分　　**浜島　永遠**

新学期の春の決意表明。「全部僕次第」「この世界の主人公は僕」というと、いやがられたり、恐れられたりすることもあるだろうが、全部自分に責任があるということなら、納得。

春とあの日　　**鈴木　梨紗**

小さな物語のように読者をひっぱってゆく。「雪だるま」に「スマイリー」という名前を付けたのがよかった。それでたった一つの自分だけの雪だるまになるから。

芝桜との思い出　　佐藤　彩香

自分のリズムをすでにもっている人。風景は変わるが、なつかしい思い出は「変わることはなかった」ということばがくり返されることで、家族の大切さが伝わってくる。

春の三色のあまい丸　鎌田　憲新

「丸」と書いて、お団子といわないところが詩になっている。「あまい丸」を「食べると春が来たな、と思う」。春に丸を付けたような詩です。

佳　作

桜より・・　　山田　陽登

相手の気持ちになることで、わかることがある。それは花でも人でも同じ。詩の基本といえる。

メジロ　　太田　晃誠

最後の二行「ぼくは一番すき。／ぐーちゃんの次に」がほほえましい。ぐーちゃんは緑のインコ。

わたげ飛行機　　海野　あかり

「真っ白でふわふわな機体」「たんぽぽ航空会社」といった比喩が秀抜です。

春に救った命　　松坂　茉生

捨てられた子猫の命を救った春。大奮闘。春のテーマにふさわしい詩です。

春風　　**齊藤　陽日葵**

「きみ」や「あなた」が春風の気配を漂わせているのだろう。おしゃれな詩です。

私の世界　　**藤崎　日那**

「人と違うからダメじゃなくて／人と違うからこそ」という考え方ができるようになったのは「ステキ」です。詩も人と同じではつまらない。この作品は「春」というテーマに直接つながらないので、残念ながら佳作です。

百花　　**モッピー**

お母さんが付けてくれた名前が「百花（ももか）」。この詩のよさは名前の力によるところが大きい。

選者作品

草つみの午後

高橋順子

「草もちを送ってあげよう」
と母から電話が来たのに
何日待っても到来しない
あのふるさとの草の香り
わたしの小腸は　日の当たる春の道になった
それではわたしが草をつみに行こう
ふるさとまでは行けないけれど
荒川の土手までなら――

子どもだったころ
ほんのわずかしか草をつめなかったが
大人になったわたしがつむと
つくしのまじった　裏白のよもぎの葉で
じきに袋がいっぱいになった
草も川沿いの道も変わらないのに

わたしの手が大きくなって
手の力が増しただけのこと

あのころはずっと同じような
日がつづくと思っていた
手が大きくなるなんて考えもしなかった

いまは　いつまでこういう日が
つづいてくれるかと思う
変わらないものに会いに
「永遠」に会いに行きたくなる

よもぎの葉を宅配便で送ると
翌日母は草つみに行ったそうだ
母も「永遠」に会いに行ったのかしら

【高校生の部】

選者　高階　杞一

「帆・ランプ・鷗」賞
太宰府にて

長崎県立上対馬高等学校
三年生　清流紫暁

優秀賞

春
愛知県立豊橋西高等学校
一年生　山口　詩織

春愁
星槎国際高等学校富山学習センター
一年生　藤野　栞

佳作

ハルカゼさん
藤ノ花女子高等学校
三年生　加藤　綾香

卒業
鹿島朝日高等学校
三年生　エキノコックス

春めくる
第一学院高等学校
二年生　菅原　響

雲
湘南白百合学園高等学校
三年生　わたなべみずき

僕と彼女と春
愛知県立半田高等学校
三年生　内田　和子

別れ
桜丘高等学校
三年生　中村　有菜

入選作品

「帆・ランプ・鷗」賞

太宰府にて

いきている緑色だった
それはいきている音だった

青々と水が渦巻いているのがきこえる
桃色の蕾も洗い流され
まっしらさらと雪にかわった

房から何粒かの雪が散ると
水面に戻っていく
しかし消えることはなく
ぴろぴろと浮かんで微睡んでいた

長崎県立上対馬高等学校
三年生　清流紫暁

優秀賞

春

たんぽぽの綿毛がとんだ
ふわふわり
そよ風に草木がゆれる
ふわふわり
花の上に蜂がとまって
ふわふわり

ちょっと暖かくてくすぐったい

春の野原のやさしい風に
私の心も
ふわふわり

愛知県立豊橋西高等学校
一年生　山口　詩織

春愁

制服をハンガーにかけたままの平日
リボンも気だるげに垂れている
遅まったり早まったりする
日の出を気にしながら
迫りくる登校日に肩をすぼめた
今朝のワイドショーでは
人が何人死んだのか
鬱々としたニュースは肌で吸収しても
どこにも発散できない
今日の開花状況は赤く染まっている

朝でもない昼でもないころ
犬に首輪　袋も忘れずに
草むらに潜りたがる犬を引っ張って
悪いことをしているような気になる
君のためなのに　そうなのに
犬の動向で独占される視界の隅では
タイヤ痕ひとつないアスファルトが
きらきら輝く
行き先までの
はじまりとおわりがすれ違う道路
増えていく車線に色とりどりの車
人間とおそろいだ

艶艶のランドセルでめかした子ども
口結んでレンズと目合わす保護者

星槎国際高等学校富山学習センター
一年生　藤野　栞

目を線にして微笑む祖父母
陽気な「はい、チーズ！」が
響く正午は
私の胃を萎縮させた
空元気の新小学一年生
胸に生やした造花が枯れるより先に
私たちが枯れてしまうなよ

儚げな桜は晴天が似合う
日に透ける花びら　太い幹
美しさと図太さが
違和感なく融合されているのが
人間と同じだと思う
私が見下されているのも
人間と同じだと思う

まっすぐ腕をのばしても
私の体を包み込むだけの桜吹雪
枝が寂しがってしまう前に
一枚分けてほしい

掬おうにも掬えない花びらが
私の掌に降り注いでくれるのを待っている
掬おうにも掬えない出来事が
私の元に降り注いでくれるのを待っている

佳　作

ハルカゼさん

藤ノ花女子高等学校
三年生　加藤　綾香

春ですね
猫に言われて気付きました
部長の文字に
偉そうになるわたし
ごめんなさい
ハルカゼさんに浮かされてました

朝が起きられません
春休みだからいいですよね
浩然さん
気持ちがわかります
早く起きろ
ハルカゼさんに怒られました

お散歩に行きます
ピンクの桜が求婚中
これは恋ですか
この高鳴りは恋ですか

いいえ
ハルカゼさんに踊らされていました

自転車に乗りました
春休み乗らなかったから
ギシギシと
変な音がなりますね
ハルカゼさんに笑われました

卒業

誰そ彼秋
青春を広げて眺む夕暮れは
タンスの匂いに胸がきゅってなる

冬は朝時
進路希望に沿わない未来なんてわろし
青嵐　花は散っても「僕らひとつだ」
口には出さず「それでいいだろもう」

彼は誰時
青春をたたんでしまう朝焼けの
タンスを閉める音一つだけ
スーツに着替え
「闘志抱きて丘にたつ」

鹿島朝日高等学校
三年生　エキノコックス

春めくる

第一学院高等学校
二年生　菅原　響

春が来た
淡いピンクに染まる事柄
生命は各々の聲を内から出して
生活は各々の温もりを表し始め
生徒らはまだ夢現、ぼんやりしていて
春が来た、一頁めくる

春が輝く
穏やかに流れる小川と時
ふわり揺れるたんぽぽの優しさ
胸に空いた穴を花びらが埋めてくれる気持ちよさ
囚われている人々の暗がりにも春光が差し込んで
いることを願う
春が輝く、一頁めくる

春に馴染む
いつもの珈琲の香りに交じる春の香り
母に包まれているような安心感に微笑んで
見上げた先の澄んだ春空に微笑んで
濁った思想や言葉に、この春の中、なびくことは
ないと微笑んで
春に馴染む、一頁めくる

春が好き
ずっと高揚している心
花見の賑わい、蝶々の舞い
誰かの笑顔、あなたの笑顔
溢れる活気が生きる意味をそのまま景色として映
しているようで
春が好き、一頁めくる

春がぼやける
季節の移ろいは受け入れるしかない
それでもまだ終わってほしくないと思ってしまう

遠のく春に追いつけるならどれほど嬉しいか
たとえ独りになってもいい、この春の中にいられるのなら
春がぼやける、涙で滲んだ一頁、震えてめくる

春が眠る
枯れてゆく淡いピンク
生命は衣を替えて
胸の穴を埋めてくれていた花びらも次々と散って
不安や痛みに蝕まれ始め
もうどうしようもなく辛くて、辛くて
布団を被って夢の中、春にいさせて
春が眠る、次は夏の頁、悪戯な風が一頁めくる

夏が来た
濃い緑に染まる事柄
一人はまだ春の夢をみている
そろそろ起きて
春に囚われた一人の部屋に夏の風が吹き込む
暑さで、たとえどれほど嫌でも、仕方なく夏を受け入れるだろう

春めくる
好きな曲をループ再生するように
好きな味を噛みしめるように
好きな人を想うように
ずっと、ずっと春めくる

雲

湘南白百合学園高等学校
三年生　わたなべみずき

ちぎったフェルトみたいな雲が、すいーすいーと泳いでいきます。
空は油絵の具を広げたようにのっぺり青く、太陽はまっすぐに光の矢をとばしています。
「おーい、雲よ。今日は雨を降らすのかー」
どっしり尻もちをついた大きな山が、上を見上げていいました。
「うーむ、そうだな、降らそうと思えば降らせるが、降らすまいと思えば降らないわけで、つまりは気分次第というわけで」
なんていっているうちに、雲はすいーすいーと流れていきます。
「雲さん雲さん今日のお天気模様を教えてください雲さん雲さん」
水たまりがぴちゃくちゃぺちゃくちゃ、自分にうつった雲にききました。
「ああ、どうしたものか、さきのことは分からぬし、分かっていても変わるもの、とにもかくにも気分次第というわけで」
そんなことをいっているうちに、水たまりはもう遠くの方。
雲はどんどんすすんでいきます。
「ねえ、雲さん、私はいつまでいられるかしら」
春がふわっと舞い上がって、雲のとなりに並びました。
「むむ、なんというべきか、きみのあとには梅雨がきて、梅雨のまえにはきみがいて、梅雨をこしたら夏がきて、秋をとばしてすぐ冬で、そしたらそしたら」
なんてもごもごいっているうちに、春は水っぽくなって沈んでいってしまいました。
雲はまた、すいーすいーと泳いでいきます。

僕と彼女と春

愛知県立半田高等学校
三年生　内田　和子

春はキライよ、と彼女は言った
どうして、というように僕が首をかしげると
だって、と彼女はつづけた
春はいつも、私から大切なものを奪っていくのだもの
幼い頃に飼っていた小鳥も
友人たちと笑いあう放課後も
そして、とうとう、あの人も

灰になったら、桜の木に撒いてくれ、なんて。

そうか、君はたくさんの別れをしてきたんだね
春と出会うたびに、若さをひとつずつ失って
僕は君の、しわくちゃな手に触れる

ねえ、と彼女が言った
私、いつかあなたに攫われたいわ
あの人と同じように

あら、でもあなたが攫うのは儚い美人だけだったかしら
こんな老いぼれじゃ、だめかしら

やれやれ、僕は便利な運び屋かい
しかたがない
君にその時が来たら
特別に君を攫ってあげよう
そしてきっと、どこかに届けてあげよう
約束するよ

老婦人は、桜の下で、ひとり、静かに、微笑んだ

別れ

桜丘高等学校
三年生　中村　有菜

今は離ればなれになってしまった
別れというのは桜がはらはらとちるようにはかない

けれど

２人で毎日一緒に帰った帰り道
２人で一緒に食べたご飯
２人で遊びに行った場所

今君は、私の元にはいないけれど
２人で作った思い出は春風のようにあたたかく
いつまでも消えることはない

選　評

「帆・ランプ・鷗」賞

太宰府にて　　清流紫暁

抽象的でかなり難解な詩である。冒頭二行の「いきている緑色」って何だろう？　「いきている音」って何だろう？　二連目の「桃色の蕾も洗い流され」というのはどういうことだろう？　というふうに疑問が次々湧いてくる。ただ、分からないなりにいろいろな想像が膨らんでくる。二連目に渦巻いている水が出てくるので、一連目の「緑」は樹木の緑ではなく、川底にゆれる藻の緑かもしれない。「いきている音」はその川の流れる音。「桃色の蕾」は水面に映った桜の蕾であるかもしれない。そこに春の雪が降り、三連目、その雪が消える頃、水面には開いた桜の花が映る。そんなふうに解釈してみてはどうだろう。「まっしらさら」や「ぴろぴろ」といった形容も新鮮。豊かな詩的才能が感じられた。

優秀賞

春　　山口　詩織

シンプルでよく整っている。平易な言葉と表現だけで書かれているので、一見簡単に書けそうだが、ここまで無駄な言葉を省き、簡潔に仕上げるのは難しい。二連目の「ちょっと暖かくてくすぐったい」という一行に実感があり、春のぬくもりと作者の優しさが伝わってくる。

春愁　　藤野　栞

繊細な心の震えが文中のさまざまなフレーズから伝わってくる。「リボンが気だるげに垂れている」や「タイヤ痕ひとつないアスファルトがきらきら輝く」といった観察眼も優れている。ラストも秀逸。ただ全体に長すぎる。推敲し、短くすればもっと引き締まった詩になったと思う。

佳　作

ハルカゼさん　　**加藤　綾香**

春の風を擬人化し、のどかな春の情景がユーモラスに描かれている。「ピンクの桜が求婚中」なんていいなあ。思わず頬がゆるむ。

卒業　　**エキノコックス**

卒業し、社会に出て行く作者の不安と希望が、タンスの開け閉めに重ねて描かれ、その発想に惹かれた。文語の使用は作者なりの実験だろうか。

春めくる　　**菅原　響**

春を本に見立て、ページをめくるごとに季節が移り変わっていく様子が巧みに描かれている。ラストは心に残る。

雲　　**わたなべみずき**

空に浮かぶ雲と、山や水たまりや春との会話。絵を付けたら、楽しい絵本になりそう。

僕と彼女と春　　**内田　和子**

なんだか不思議な作品。桜の下にいる老女と僕との会話だが、「僕」って何だろう？　春の風？　それとも「死」の使い？

別れ　　**中村　有菜**

春を背景に、愛する人と別れた切ない思いがまっすぐに伝わってくる。

選者作品

人生が1時間だとしたら

高階杞一

人生が1時間だとしたら
春は15分
その間に
正しい箸の持ち方と
自転車の乗り方を覚え
世界中の町の名前と河の名前を覚え
さらに
たくさんの規律や言葉やお別れの仕方を覚え
それから
覚えたての自転車に乗って
どこか遠くの町で
恋をして
ふられて泣くんだ

人生が1時間だとしたら
残りの45分
きっとその
春の楽しかった思い出だけで生きられる

詩集『春'ing』より
（一九九七年　思潮社刊）

丸山薫の略歴と業績

明治三十二年　六月八日大分県生まれ。
明治三十八年　内務省官史の父の転勤で京城（ソウル）へ移住。
明治四十四年　父の死により母方の祖父の地、愛知県豊橋市に移る。
大正　七年　東京高等商船学校（現・東京海洋大学）に入学。病気のため退学。
大正　十年　第三高等学校（現・京都大学）に入学。
大正　十五年　東京帝國大学（現・東京大学）に入学。
・昭和元年　第九次『新思潮』同人となる。
昭和　三年　高井三四子と結婚し、詩活動に専念。
昭和　九年　堀辰雄、三好達治と詩誌『四季』を創刊。
昭和　十年　第一回文芸汎論詩集賞を受賞。
昭和　二十年　山形県西川町岩根沢に疎開。岩根沢国民学校代用教員を務める。
昭和二十三年　疎開先の山形県西川町岩根沢から愛知県豊橋市に戻る。
昭和二十四年　愛知大学講師、後に教授となる。
昭和二十六年　中部日本詩人連盟結成、委員長となる。後に中日詩人会に改組され、引き続き会長。
昭和三十二年　第十回中日文化賞を受賞。
昭和四十二年　旧四季同人を中心に詩誌『四季』を復刊。
昭和四十九年　愛知県豊橋市の自宅で永眠。

丸山薫の作品には、第一詩集『帆・ランプ・鷗』をはじめ『幼年』『物象詩集』『青春不在』『連れ去られた海』『蟻のいる顔』など十六冊の詩集と、短編小説集『蝙蝠館』、エッセイ集『蝉川襍記』、その他多くの詩選集『丸山薫詩集』がある。

没後、昭和五十一年に『丸山薫全集』全五巻が刊行され、さらに平成二十一年は、丸山薫の生誕百十年、没後三十五年に当たるため、全六巻からなる『新編　丸山薫全集』が刊行された。

豊橋市高師緑地には丸山薫詩碑が発起人桑原武夫氏らによって建立され、また、愛知大学豊橋キャンパスには、丸山薫作詞の学生歌の詩碑が愛知大学短期大学同窓会によって建立されている。その他、山形県西川町には詩碑が建立され、丸山薫記念館がある。

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞は、丸山薫賞の運営委員として丸山薫の業績の顕彰と普及に取り組み、本市の文化振興にご尽力された「故　神野信郎氏」によるご寄附を財源に、実施しています。

丸山薫「帆・ランプ・鷗」賞　作品集

令和4年度　第2回　～「春」～

令和五（二〇二三）年二月四日　発行

発　　行　豊橋市文化・スポーツ部「文化のまち」づくり課
〒四四〇ー八五〇一　豊橋市今橋町一番地
電　話　〇五三二ー五一ー二八七四
ＦＡＸ　〇五三二ー五六ー一〇八一
E-mail　bunka@city.toyohashi.lg.jp

印刷所　㈲　伊　藤　印　刷

✽表紙・裏表紙イラスト　佐野　妙